# びっくり学園

# ピンチ大混戦

だいこんせん

スタンリー・キーゼル 作
越智 道雄 訳
大和田美鈴 画

# っくり学園
# ピンチ大混戦

スタンリー・キーゼル 作
越智　道雄 訳
大和田美鈴 画

ポプラ社の世界こどもの本・9

びっくり学園　ピンチ大混戦　　定価　880円

1983年8月　第1刷©

■ 作　者　スタンリー・キーゼル
■ 訳　者　越智道雄（おちみちお）
■ 発行者　久保田忠夫
■ 発行所　株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5
〒160　振替東京4-149271
■ 印　刷　新興印刷製本株式会社
■ 製　本　石毛製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

N.D.C.933/182p/22cm
8097-143009-7764

びっくり学園

ピンチ大混戦――もくじ

1 アイダおばさん 6
2 アイダおばさんの調査活動 17
3 びっくり学園 30
4 センセ連中、ひたいあつめてヒーソヒソ 44
5 こいつが宣戦・報告だ 54
6 〝やせ〟のしかえし 65
7 センセもセートも作戦開始 73
8 モーモーコ先生、ひどい目にあう 87
9 ジェローム先生の夢が どうしてむなしくつぶれたか 94
10 ミスター・シメダーシー、劇的に登場 98

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

11 脱走生徒たちにつげる 108
12 〝やせ〟、おかしな夢を見る 119
13 ビッグ・アリスはもうサイコー 124
14 馬上試合 134
15 馬上試合はつづく 145
16 試合の結果は？ 152
17 軍使は〝鼻フンフン〟 163
18 終わり——それともはじまり？ 167
訳者あとがき 181

**▶作者　スタンリー・キーゼル (Stanley Kiesel)**

1925年生まれ。20年間幼稚園の教師をする。1971年からミネソタ州ミネアポリス市の公立学校で、研究費をもらって詩を書き、学校や生徒側の依頼で講義をする（ポエト・イン・レジデンス）。
この作品は、アメリアで学園紛争がつづいていた1968年に、8歳と9歳の娘に生徒の反乱を語ったのがきっかけで、本になったものです。

**▶訳者　越智道雄**（おちみちお）

昭和11年、愛媛県で生まれる。明治大学教授。著書に「遺贈された生活」、訳書に「青さぎ牧場」「月の裏側」「"機関銃要塞"の少年たち」ほか多数ある。

**▶画家　大和田美鈴**（おおわだみすず）

1951年東京生まれ。魚座。和光大学人文学部芸術学科卒業後、デザインプロダクションに所属。この春、独立。主に雑誌などで活躍。さしえに「ハイ、ぼくらちょこまか族」がある。

The War Between
the Pitiful Teachers
and the Splendid Kids
(Part One)
by Stanley Kiesel

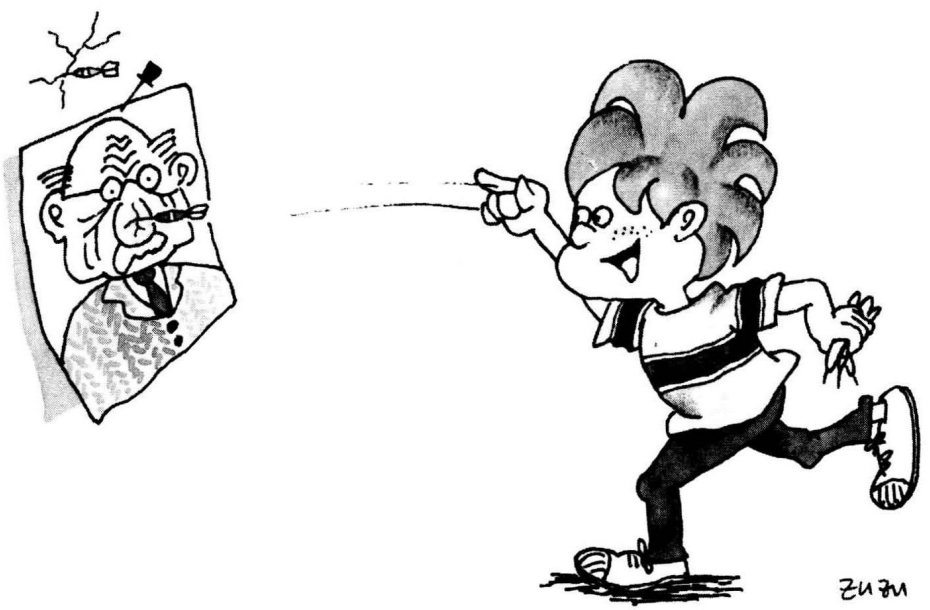
Copyright © 1980 by Stanley Kiesel
All Rights Reserved.
Japanese translation rights arranged
with E.P.Dutton, Inc.
through Japan Uni Agency,Inc.
Japanese text copyright © 1983
by POPLAR PUBLISHING COMPANY,Tokyo

# びっくり学園

# ピンチ大混戦

だい　こん　せん

スタンリー・キーゼル 作
越智　道雄 訳
大和田美鈴 画



## アイダおばさん

放課後。

用務員のアイダおばさんは、そうじも、のこるはあとひと教室、まさか、いのこり生徒などいようとは思わなかった。それなのに、なんとそのさいごの教室には、赤毛でチビの男子生徒がのこっていて、そのときちょうど、黒板のチョークをポケットにつっこんでいるところ。

「ここ、きみのクラス?」おばさんはきいた。

「うん」

「それ、きみのチョーク?」

「ううん」

「なら返しとくれ。そして、とっととお帰り」

その生徒、どう見たって、五さいか六さい以上には見えない。まるで天の川みたいなそばかすが顔一面にちらばり、まるで日本の浮世絵にえがかれた波の絵をオレンジ色にぬりかえたように、まえがみがぱらりとひたいにかかっている。

「チョーク、いるんだもん」

「なら、ちゃんとことわりをいってからにしないと。それがふつうだよ」

チョークがつき返された。おばさんはそれを教卓にもどす。

「ネルスン先生なんか、箱にいっぱい持ってるよ」

おばさんは大がらな黒人女。モップをゆかにおくと、生徒をじろじろ見まわした。

「どうしてチョークがいるのよ？　名前は？」

「〃やせ〃。ほんとはティミーだけど、みんな〃やせ〃って呼ぶんだ」

おばさんの口からものすごいわらい声がとびだして、男子生徒は、思わずその大声にはじきとばされ、あおむけにひっくり返りそうになった。

「名は体をあらわすっていうよね。あたしは〃赤毛〃って呼び名かなって思ったけどさ」

「それがちがうんだ。一度も〃赤毛〃って呼ばれたことはないよ。毎日この教室そうじしてるの？」

「仕事なかまのジムとこうたいでね。ジム知ってるかい？」

「見かけたことはあるけど、知っちゃいないな。やっぱりチョークもらえない？」

おばさんはくるりと大きなせなかをむけ、黒板のチョークいれをモップでぬぐった。

「だめ」おばさんが返事したとたん、うしろでチョークがゆかにたたきつけられ、こなごなにくだける音がした。〃やせ〃はいなくなっていた。

つぎの日の午後も、〃やせ〃はおなじ教室で待っていた。

「おや、きみかい。またあえてうれしいってわけにはいかないね」

そうじバケツを流し台へおきながら、おばさんがいやみをいった。

「チョーク投げたのは悪かったよ。でもおばさんをねらったわけじゃないんだ」

「どこをねらったにしろ、そうじはこのあたしがするんだからね」

「水いれるの手つだってあげようか?」

おばさんが流し台からはなれると、〝やせ〟はじゃぐちをひねった。しばらくしておばさん——。

「さっさと家へお帰り。ママがしんぱいしはじめないうちにさ」

「ママなんていやしないよ」〝やせ〟は両手でバケツを持ちあげると、くつの上に水をはねかせながら、そっとゆかにおろす。水がはねたことには、二人とも見て見ぬふり。かれはバケツのなかをのぞきこんだ。「水はこれくらいでいい?」

「まあね」おばさんはスポンジをつっこんで、なん度かしぼった。

「どういうこったね、ママなんていやしないって?」

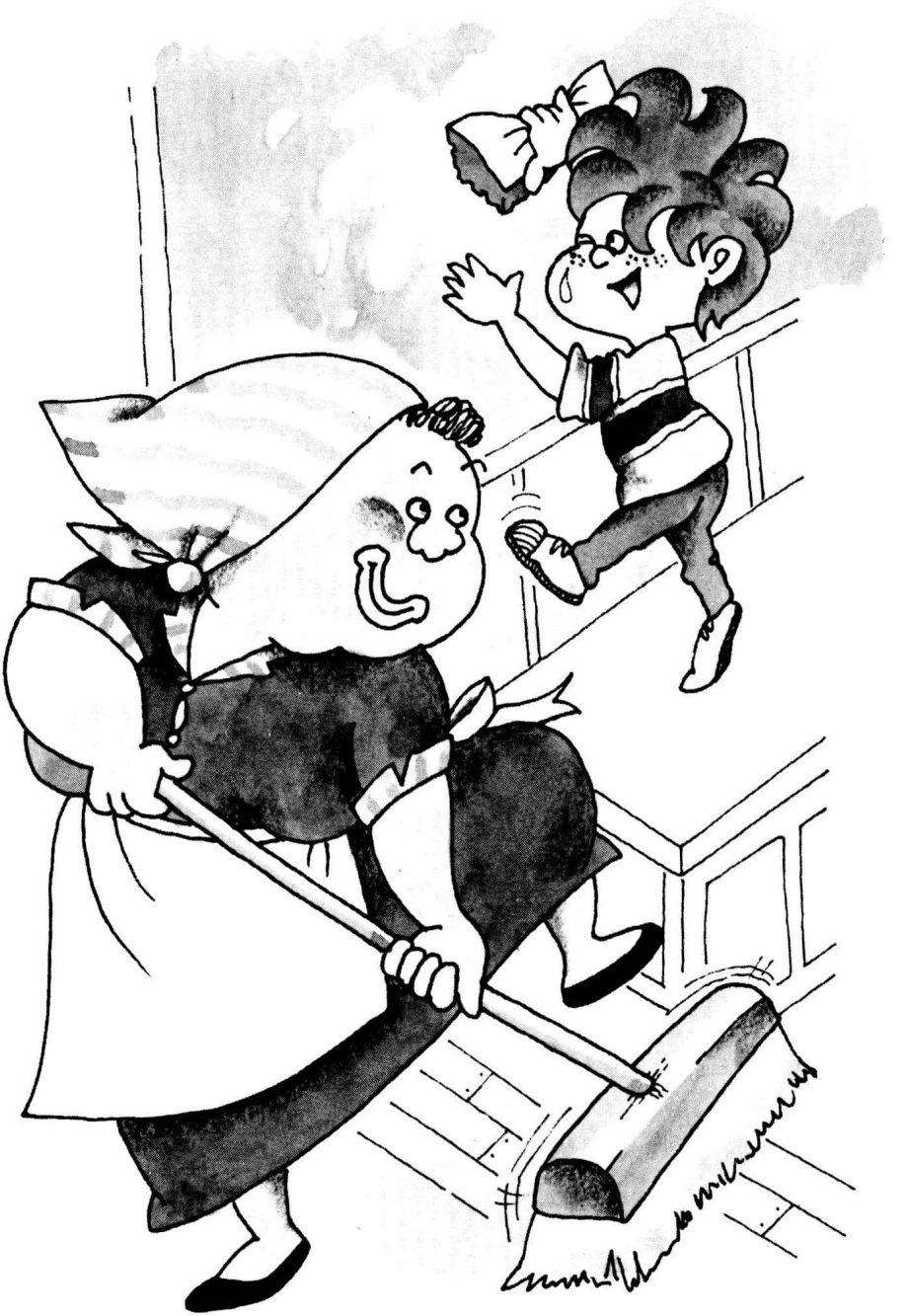
「里親(さとおや)んちに住んでるんだ。アトキンさんちにね。あそこにゃ里子(さとご)の赤んぼがいっぱいいるから、こっちがどんなにおそく帰ったって、気づかれやしないさ」

「わかったよ、〝やせ〟」おばさんはスポンジをつきだした。

「アイダおばさんのためにひとはたらきしておくれ。黒板をふくんだよ。水をぼたぼたたらさない



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



でね。スポンジがよごれたら、またバケツにつけて、ようくしぼること」

〝やせ〟はゆかいそうに、いわれたとおりに黒板をふきはじめた。

「いくつになるの？」

「五さいと半年」

「ほねと皮のあいだに、もうちょい肉をつけないとねえ」

「あんましたべないんだ」

「もうひとしぼりしたほうがいいよ」

〝やせ〟はその日から、放課後もいのこって、アイダおばさんとつきあうようになった。おばさんはかれにそうじを手つだわせる。

ある日、アイダおばさんは黒板のまえに立ちどまって、先生が生徒の名前を書きならべた横に、活字体で「イイ子になりますように」と書きそえてあるのを指さしてきいた。

「どうしていつも名前がでてるんだい、〝やせ〟？」

「おれがワルだからさ。そこに名前がでるやつらはワルサの常連なんだ」

「どんなワルサだい？」

「そりゃあ、ものを投げるとか。砂なんかをね。ブロックをたたきこわすとか。ならぶとき、すぐ

せんとうにでたがるとか。口ごたえするとかさ」

「口ごたえ？　そりゃあ確かにワルいよ。口ごたえはよしにして、口のみこみをやるこったね」

「口のみこみ、どうやって？」

「あいての目をまっすぐにらんで、こいつイエスといってくれるといいがな、でもノーといってもかくごはできてるぞと、じぶんにいいきかせるのさ。あいにくとノーだったら、できるだけうまいぐあいに、そいつをかみくだいて、ぐっとのみこんじゃうのさ。いつかまた、ほかのだれかに、そのノーをパスしてやることになるんだからね。こっちのノーをのみこんでくれる人間が、どうしても必要なんだよ。それであいこってことになって、世のなかなんとかやっていけるわけだもんね。それをさ、口ごたえなんかしてみな、じぶんはノーをのみこめない人間だって、あいてに宣言してるようなもんじゃないか。なんてったって、この世のなか、イエスよりはノーのほうが、うんとたくさんあるもんね。こいつはまちがいないよ」

「どうして、イエスばっかりってわけにいかないのかね、おばさん？」

「世のなかがイエスばっかしじゃ、できてないからさ。だからあんたも、そんなにやせっぽちになっちまったんだ。イエスがたりなくて栄養失調になったわけさ。さあ、こっちへついといで」

おばさんはべんじょのドアをおしあけて、なかへはいっていった。

おばさんは便器のなかへ太いうでをつっこんで、すごいいきおいでごしごしこすった。

「あたいのこのうでを見てみな。こいつは長いこと便器にノーとはいってないよ。ずっとイエスばっかしさね。このうではまだ口のみこみのコツをわすれちゃいない」

「べんじょそうじがすきなのかい、おばさん？」そうきいてから、〝やせ〟は顔をしかめた。

「おれはすきになれそうもないなあ」

「あのね、〝やせ〟。いずれあんたもむりにもすきになるしかあるまいよ。べんじょそうじなんて、イエスとしちゃちっぽけなもんさ。毎日がちっぽけなイエスの集まりでね。それでじぶんをならしといて、いざでっかいイエスをいわなきゃいけなくなると、どかっといっちゃうわけよ」

「でっかいイエスって？」

「そいつはじかにぶつかってみりゃわかるさね」

おばさんは糸がほどけた服のむなもとを見おろした。「あれっ。ボタンがとれちゃった」

「ここにあるぜ」〝やせ〟が小さな排水穴（はいすいあな）をのぞきこんでさけんだ。

おばさんはかがみこむと、排水穴のふたをつまみあげて、片手をあなにつっこもうとした。

「ああ、おれがやるよ！」

〝やせ〟が片手をつっこんで、一分後にはぬれた貝（かい）がらボタンをつまみあげた。

おばさんがにやりと笑った。

「あんたって〝やせ（スキニー）のガリ助（マリンキー）〟（、スター・スキニーマリンクというのがラヴィニア・ダーウェントの『スーラ』ノリーズに登場する。）そっくりだね」

男の子は目をパチクリさせて、いった。

「これからはそれをおれの名前にするよ」

そしてそのとおりになった。〝やせ〟の姓はいつも、かれがたまたまそのときいっしょにくらしている、里親の姓だったのだ。〝やせ〟の学校の成績表には、いつもかっこのなかに、スミスという姓が書きこんである。これはスミスという夫婦がいて、かれをこの世にうみおとしたということ。うみおとしたあと、その夫婦はかれをすてる気になって、わずか生後一週間の身で、〝やせ〟はぜんぶの部屋が通りにめんしたアパートのげんかんに、ショッピングバッグのはいっていたボール箱にいれてすてられてしまった。この子はわたしの孫だからと、名乗りでたおばあさんがいて、ふたつになるまでその人に育てられたけど、おばあさんが死ぬと、〝やせ〟は州のしせつにひきとられた。そこには五さいになるまでいて、ベッドと食事にだけはありつけた。それから〝やせ〟の里親めぐりがはじまる。めぐりめぐって、いまはアトキン夫婦が里親というわけ。

「アトキンのおばさん、きょう学校に呼びだしくらっちゃった」〝やせ〟がアイダおばさんにいった。

「なんで?」

「おれにキョーチョーセーがないからだってさ」

「どういうことだったんだい?」

「おれ、これまでのクラスからおんだされることになったんだ。教室の窓から見てると、先生がア

トキンのおばさんに、おれの〝なければ集〟をごっそり見せてるところだったね」
「〝なければ集〟ってなんだよ？」
「あれさ。キョーチョーしなければってやつ。つみ木はかたづけなければいけません。ちゃんと手をあげなければいけません」
「ああ、わかった。あの〝なければ集〟かい」
「おばさんは四番教室もそうじするの？」
「するとも。それがなんだね？」
「こんどはあのクラスへいれられるんだ。先生もかわって、ロング先生になる」
「フーン。ありゃあ、きびしい先生だよ、あのロング先生は。あたしにだって、いつもこうるさいメモをのこしてるもんね」アイダおばさんは首をふって、汗のにじんだひたいをうでぬぐった。
「あの人はいばり屋でさ、いばり方もちゃんとさまになってるもんね」
「PTAのあつまりなんかの幹事だもんな」
「そうかい？　いつも学校に花持ってくるけどさ、花のむこうがわの顔はにこりともしてないよ」
二、三週間してアイダおばさんは、また〝やせ〟にあった。おばさんが七番教室のゆかをふいていた午後の四時半に、かれがやってきたのだ。
「なにかあったのかい、〝やせ〟？　ロング先生のことかね？」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com